OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	枕草子の名義の論
Author(s)	林, 和比古
Citation	語文. 1959, 22, p. 24-29
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68535
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

枕草子の名義の論

林　和比古

一

「枕草子名義考」なる一編を綴ったのは本年初頭であった。その稿は事情でまだ活字になってゐないが、そこでは昭和32年までの諸家の論述にひとわたり目を通し論評することができた。その後世に出た枕草子研究のうち管見に入った次の五著から特に名義論に限定して問題を取り上げ、前記拙稿の追補としたい。

(1)塩田良平博士「枕草子」――角川書店発行、日本古典鑑賞講座第九巻。昭和33年1月刊。

(2)塚原鉄雄氏「清少納言と枕草子」――大阪市大、人文研究第9巻第7号所載。昭和33年8月25日発行。

(3)岸上慎二氏「枕草子」――岩波書店日本古典文学大系所収。昭和33年9月5日発行。（この書は池田・岸上二氏共著であるが、巻頭解説の部は岸上氏の執筆とみなされるから、同氏の説として取扱った。

(4)秋山虔氏「枕草子」――岩波講座　日本文学史第三巻。昭和34年6月10日発行。

(5)田中重太郎氏「古語の多義性について」――平安文学研究第22輯所載。昭和33年11月25日発行。

右の五編がある。(5)の論文の後半は主として(2)の塚原氏の所論を批判したもので、従来の田中氏の説に変化はないのである。

二

第一に清少の「枕草子」なる書名はいかなる理由でつけられたか、またその命名者は誰であるかについて五氏の考をみることにしよう。

(1)の塩田氏は、跋文の「枕にこそは云々」の文辞によって命名されたものであり、命名者は後人であることを幾分の躊躇を示しながらも言明してゐる。

。通説としての跋文の枕からとって後人がつけたといふ穏当な説に賛成しておこう。（前掲書7頁）

しかしまた氏は次の様に迷ってもゐるわけである。

。……だから題名としての「枕草子」は案外作者がつけたかもしれないのだ。しかし……（同書7頁）

(2)の塚原氏も書名は跋文の「枕」に基いて命名されたものであらうとする。従って固有名詞といふことにならう。但し命名者は明らかに決定されてゐない。

。「枕草子」という題号は、その命名された時期と人物とは、別として、清少納言が、〈枕にこそはし侍らめ〉と応答して、定子から料紙を下賜された事件を契機として、執筆された草子というほどの意味となる。（前掲書50頁）

(4)の秋山氏はだいたい塚田氏の考へ方に従ふやうである。

。なおここで、『枕草子』の書名がそこから由来すると断じてもよい跋文中の「枕にこそは侍らめ」の「枕」について一言しておく。……私も特に主張があるわけではないが、いまさしあたっては塚原鉄雄氏の考えかたに関心が寄せられる。（前掲書5—6頁）

右の三者はもっぱら跋文の「枕」に基いて書名がつけられたとするのであるが、(3)の岸上氏のはやゝ異って、跋文の「枕」によった事も否定できないが、それにのみ限定できず他にいろいろの理由があったらう。例へば枕詞の草子・身辺座右の草子等にも理由がありさうにみえるとするのである。従って普通名詞か固有名詞かも言明されてゐない。たゞ命名者は後人説をとってゐる。（前掲書7頁）

(5)の田中氏の説は古典全書の解説などで周知のやうに、跋文によって後人が命名したといふのでなく、「まくらさうし」なる普通名詞は清少納言以前から存在し、それは題詞を書いた草子のことであり、清少もさやうな種類の書を書かうと意識して書いたのであるとされる。従って跋文の「枕」はその意図が反映されて言葉になったものであるとするのであるから前四者とは対立的な立場に立つものである。（たゞし岸上氏は田中説をも含んでゐてその点混沌としてゐる）

三

第二に、清少納言枕草子以外に、当時別種の枕草子があったか否か、換言すれば栄花物語の「枕草子」及び源信の「枕雙紙」との異同如何といふ問を発してみよう。

(1)の塩田氏は三者別物であると一往は考へるやうである。

(イ)清少納言枕草子は「枕ごと」を書き集めた書で、女房物識り辞典である。即ち女房が座右に置いて物ごとの典拠とする本である。（前掲書4頁）

(ロ)栄花物語の枕草子は部厚い草子のことで内容には関係がない。（同書4頁）

(ハ)源信の枕雙紙は仏法に関する大切な心得や知識の覚え書き、即ち備忘録といふ意味である。（同書4頁）

塩田氏によれば、当時「枕草子」と普通名詞で呼ばれる(ロ)・(ハ)二種の草子があった、とするのである。（同書4頁）そこへ物識り辞典としての、性質の異った、清少納言枕草子が現はれたのであるから、結局三種の枕草子が出現したことになる。それだけならばまだ明瞭であるが、氏は清少納言枕草子は、さらに(ハ)の枕草子の性質も併せ持ってゐるといふのだから、問題はいっそう複雑になる。

。そこで、単に当時の常識の上から考えれば、この枕は前に述べたような意味の枕であり、また備忘録としてとってよい。つまり「枕にこそは侍らめ」の意味は「枕ごと」にこそ侍らめ」「枕草子にこそ侍らめ」の省略と見てよいのである。（同書5頁）

。その枕は当時の常識的な意味の枕や「枕草子」を匂わせた、ととりたいのである。（同書7頁）

（一及び＝は林が加へた。）

引用文の一部は「枕ごと」に当り、＝部は(ハ)の備忘録としての「枕草子」のことと一往は考へられる。要するに塩田氏は清少納言枕草子のもつ「類集段の存在」といふ特異性と、「日記段・随想段の存在」といふ一般性とを同一の書名「枕草子」に含めて解かうとしたため、前者は「枕ごと辞典」を意味する枕草子であり、後者は備忘録を

意味する枕草子であって、即ち同一の書名「枕草子」の中に異種の文段を包有する現象をこれで説明しようとするのである。しかし一方の書名は後人のつけた固有名詞であり、他方は以前からあった普通名詞であるとせられるらしいから、かかる背反する二義を同一書名の「枕草子」が併せもってゐるといふことは、少し奇異なことであるといはねばならない。

塩田博士はさらにこの考へを援護するために跋文の「枕」に「枕こと」と「枕草子」の二義を同時に持たせたことは前掲引用文で明らかである。この二義は、縁語・掛詞・秀句等における本義・余義の関係に立つ二義でなく、対当の関係に立つ、いはゞ本義としての二つの意義であると解されるから、これは言葉の使ひ方として無理ではないかと思はれる。

(2)の塚原氏の説はどうか。氏は枕草子に三種を立てる。

(イ)清少納言の枕草子。これは跋文に「枕にこそは云々」とあるのに基いて命名された「枕の草子」で、この書名は内容に関係しない。命名の事情から考へて固有名詞といふことになるのであらう。

(ロ)栄花物語の枕草子。これは夫木抄の枕草子と同じものであり、分厚い草子である。

氏は普通名詞とする。

(ハ)源信の枕雙紙。これは枕上に置くもので、(イ)とは由来を異にする。普通名詞か固有名詞か明言はない。

。したがって、清少納言の「枕草子」とは清少納言が、〈枕にしようといった冊子〉でなければなるまい。「栄華物語」のは、〈枕になるほどの分厚い冊子〉、または、〈枕としても使用される冊子である。〉そして源信のそれは、〈枕のかたはらにおくべき冊子〉ということになる。(前掲書51頁)

。普通名詞としての〈枕冊子〉は、「栄華物語」(若ば枝)に見える。だが、清少納言の「枕草子」が、それと同じ意味かどうか、疑わしいと思う。源信の「枕雙紙」と清少納言の「枕草子」とでも、その意味を異にするのだから、この〈枕冊子〉が、同じ意味でなければならない必然性はない。

(前掲書50頁、傍点筆者)

塚原氏は三種の枕草子を想定されるが、その相互の関係についての説明があいまいである。(……部を見よ)。枕草子・枕雙紙等同類の外形をもってゐる以上は、同音異義語でない限り、なんらかの共通概念を有するものと思はれるが、氏の説明では三義が相互に無関係である。(このことは塩田説にも言へる)

この点を(5)の田中氏も衝いてゐる。

。また「枕」や「枕冊子」にあまりに多義を考へ、栄華物語の「枕冊子」と源信僧都の「枕双紙」と清少納言の「枕冊子」と三つとも別義に解するお考へはいかがであらうか。従来の学者があまりに一義的に解するのはいけないとせられるにしても、三つの「枕冊子」を三つとも別別の義に解かうとせられるのはあまりにも自分の考へに忠実にならうとせられたきらひはないであらうか。

(5)の前掲書110頁)

この評語、同感である。

なほ田中氏自身の説は周知のやうに枕草子を一種で解かうとせられるので、「題詞の書」(または「歌枕の辞典」)として普通名詞とする。かやうなものはその書物の性質上分厚になるとする。清少納言の枕草子も栄花物語や夫木抄の枕草子も同一種の書

物となるのである。（枕冊子題号考・古典全書枕冊子解説）ただし源信の枕雙紙については説明がみあたらない。

(3)の岸上氏の説では、「清少納言枕草子」なる書名の成立は一つの理由に限定し得ないとするのみで、栄花物語の枕草子、および源信の枕双紙との関係や異同についても言明が無い。たゞ命名者を後人としてゐるが、その根拠も明かに述べてゐない。

(4)の秋山氏は塚原氏の見解を採って、枕草子は跋文の「枕」に由来すると断じてもよいとするのであるが、塚原氏の、栄花の枕草子や源信の枕双紙と清少納言のそれとを別種とする考へまでも採られるか否かは言明が無い。

四

塩田・塚原・秋山三氏は清少納言枕草子が跋文の「枕」にもっぱら基づいて命名されたとするのである。

第三の問題は、しからば跋文の「枕」が清少によって如何なる意味で使はれたかを考へることである。

塩田氏の説は次のやうである。

(イ)「史記」に対する秀句で、「しきたへの枕」（又は催馬楽の細底と枕）の関係から「枕にこそ云々」と酒落たのである。これは「枕」の使用を説いたのであって、意味は次の(ロ)(ハ)の二義になると考へてゐるらしい。

(ロ)「枕ごと」即ち「座右に置いて物ごとの典拠とするもの」の意であるとする。

。身辺、すなはち座右に置いて物ごとの典拠とするものが枕だ。（前掲書4頁）

(ハ)「備忘録」の意である。源信の著もこれだとする。

。この枕は前に述べたような意味の枕であり、また備忘録としてとってよい。つまり「枕にこそは侍らめ」の意味は「枕ごとにこそ侍らめ」「枕草子にこそ侍らめ」の省略と見てよいのである。（傍点筆者）

かやうな書名から見ても、枕草子の内容には辞典的な性質と備忘録的な性質が混ってゐるといふのである。

跋文の「枕」は右の二意に使はれたばかりでなく、更に当時には次のやうな各種の意味に使はれたといふのである。

(ニ)「枕もと」「寝てゐるあたり」の意味から、「手近なもの」の意になる。（前掲書4頁参照）

(ホ)「上おきの詞」の意がある。

。まくらは足に対して「頭の方」を言ふ。「上おきの詞」といふ意味である。枕詞などもこの意味である。（前掲書3頁）

(ヘ)「歌枕」の省略である。

。まくらは歌枕の省略である。枕草子はこの歌枕を集めた書だ。（前掲書3頁）

結局、塩田氏は当時「枕」に(ロ)(ハ)(ニ)(ホ)(ヘ)の五つの意味があったと考へてゐるやうである。そのうへ、五種の「枕」からそれぞれの草子が生じるといふのであるから、五種類の枕草子があったことになると考へねばならない。（前述塩田説で枕草子が三種類あったとしたが、さらに二種ふえることになる）

。以上のように「枕」にはいろいろな意味があるが、だから枕の冊子といえば、そういふ「枕」を書いたものだととるのも一応まちがいではない。（前掲書4頁）

。そこで、単に当時の常識の上から考えれば、この枕は前に述べたような意味の枕であり、また備忘録としてとって

よい。（前掲書5頁）

。その枕は当時の常識的な意味の枕や「枕草子」を匂わせた、ととりたいのである。（前掲書7頁。点線筆者）

塩田博士は跋文の「枕」は(ロ)(ハ)の二義であるとしながら、（それさへ納得しかねる考へであることは前述したが）さらに(ロ)「枕ごと」に当るべきところで、「『枕』にはいろいろな意味がある」とか、「常識的な意味の枕」といってゐるところをみると（前引用文の点線部参照）、氏の解する「枕」には(ロ)以下の五種の意味が混在してゐるとしなければならぬ。

右の考へ方と対蹠的なのは(2)の塚原氏の説である。氏は「枕」にいろいろの意味をあてるのを否定して、「寝具枕」の一義を採り、それ以外の意味で「枕」が単独で使用されることはないとした。

つまり中宮が、「天皇は史記を書かせられたが、こちらは何を書いたらよからう」とお尋ねになったに対し、清少はしきたへの枕の媒介で「寝具の枕でございませう」と答へた。表面上の意味はたゞそれだけだと塚原氏は云ふのである。

われわれはかかる返答は失礼だと想像するのだが、氏は反対で、真面目に古今集とか後撰集とかの書名をお教へするのはかへって潜越に当るとし、「寝具枕」といふとぼけた冗談がかへってよいのであるとする。そして中宮も冗談であることは自覚してゐて、心中では枕ノ経・枕書・歌枕・枕言等を連想し、「清少の本意は歌枕や枕言等の書物を書け」といふことだと忖度したといふのである。一方清少の意中は、別にそんなつもりでお答へしたといふのでなく、たゞ枕ノ経・枕ノ書を連想してゐただらうとするのである。つまり中宮と清少の心中は、寝具枕を共通の地盤として、其他は、勝手に想像をはせたといふことにならう。（氏のやうに考へれば、枕経・枕書を共通に連想したとする根拠もなささうではないか）

「枕」を寝具枕とする説は江戸の諸学者の外に山内・佐藤・坂元諸氏があり（田中氏・枕冊子題号考21頁）、植松・池田氏等も根本はそれであるが、連想物として枕ノ経・枕ノ書・しきたへの枕・細底と枕等の想定に苦心を払ってゐるわけである。何れの人々も中宮と清少の心意が一致してゐると解する点では共通であったが、塚原氏に至って両者の心意（連想）が一致してゐなかったとする点で変った考へ方といへる。

秋山氏もこの点について次の様にのべてゐる。

。ただし塚原氏のばあい、中宮の心理にのみ「枕言」「歌枕」への連想ののびしか想定しないのはいかがであろう。……しかしやはり「歌枕」「枕言」は清少納言の連想の範囲の中にも強く、というより中心的に存在するものと見なすべきではなかろうか。（前掲書6頁）

「枕」から「寝具枕」以外のあらゆる意味をせっかく斥けておきながら、連想といふはたらきの中で再び歌枕・枕言・枕ノ経・枕ノ書等々を拾ひあげたことは何を意味するのだらうか。塚原氏もやはりこれらと完全に絶縁することができず、何らかの意味で「枕草子」へ連関させておかねばならなかったとみられる。わたくしは思ふ。

(a)冗談で「寝具枕でせう」と答へたのに対して、中宮が「さば得てよ」と気前よく下賜されたといふのはわたくしには腑におちない。不粋なわれわれなら「何のことなの？　何を書けといふの？」と反問したいところである。

(b)塚原氏の想定に従へば、清少には中宮の希望する書物内容が分っていないはずなのに、これを貰って帰るといふことは清少としては大胆すぎる振舞である。

わたくしは、前述の様に「無躾な清少の返答」といふ外に、右の(a)(b)の理由により、塚原氏の設定される会話の場面には賛成しかねるのである。

さらに重大なことは「枕」が「寝具枕」以外に単独では使用されたことがないと言はれるが、果してさうだらうか。吉田幸一氏が異本栄華から発見された「枕」をどう解釈されるのであらうか。

(3)の岸上氏・(5)の秋山氏は「枕」の意味について特に明言がない。

以上管見に入った卅三年以後の諸氏の論著では多義説が勢力を占めてゐるやうである。以前の学者は「枕草子」を一種として解かうと苦心してゐたものである。(もっとも「枕」を「題」ととく田中氏の説もよく見れば、歌枕・枕言・枕詞等から抽象してゐるので、結局はそれら諸語へ連ってゐるから、やはり多義説であると私は思ふが。)

事実が多義ならば、多義で差支へないが、多義にきめつゝも、歌枕・枕言・枕詞等の語自身の意義が明らかでなく、その結果相互の意義の限界も明瞭でなく、けっきょく枕・枕草子・歌枕・枕言等の意味が曖昧・混雑してゐるのが、現在の様相だと思はざるを得ないのである。

五

失礼をも省みず、先輩・新進の所説を論評したわけだが然らば評者自身の所見は如何と反問せられることは必定であらう。わたしの考へは「枕草子名義考」で詳述したが、藤井高尚によって想定せられた「座右の手控へ」説である。(契沖の説は少し内容が相違するやうだ。)小著「枕草子新解」では田中氏に従って題詞集を採ったが、これは斥け、手控へ説にしたのはだいぶ以前になる。公刊物では日本文学史通論(平林治徳編、新元社発行 昭和32年4月25日発行)の「枕草子」の項で既に述べた。

手控へ説に対しては世の研究者より次の疑問が出されることは必定であらう。

(1)「枕」が「手控へ」の意味に使用された例があるか。

(2)手控へ説では類集段の存在に対する説明が従来は出来ないのであるが、これ如何。

(1)に対して吉田幸一氏の発見による異本栄花の例があり、わたくしも一例提示した(吉田氏は身辺秘書とするのであるが、私はたゞ例証そのものをとる)

(2)に対する詳細は近く公表するつもりである。(基本的な考へは昭和二六年の「清少納言の精神機構」其他に書いているが)いづれ右の論述で読者の批判を得たいと思ふ。

(34・6・29)

秋山虔氏から岩波講座日本文学史「枕草子」の抜刷を最近恵贈された。厚く同氏にお礼申上げる。実はそのとき筆者はその抜刷に対して私信の上で感想を書き初めたが、あまりに錯綜しているので、いっそ整理して公表した方が意を尽すこともでき、また前記小考の追補にすることもできると考へてまとめたものである。名義考未刊の点は秋山氏並に読者諸氏の御諒察を得たい。

——大阪大学助教授——